

イエスが十字架につけられるときの人々の様子を、本日のテキストの前後から見えていきます。イエスが自分自身をつける十字架の木を背負って歩いていく途中で、イエスに代わってその十字架を背負うことになったキレネ人シモンがいました。また、十字架の木をかついてゴルゴダの丘へ向かって歩く様子を『民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った』(27節)のに対して、イエスは『エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け』(28節)と語っています。

議員とローマ兵の嘲りと十字架に架かっているイエスを『民衆は立って見つけていた』(35節)が、イエスが息を引き取ったあと、その民衆は『胸を打ちながら帰って行った』(48節)のです。こういう民衆や女性たちがいたのです。これに対して、イエスが着ていた衣服をくじを引いて分け合う人々がいました(34節)。イエスのことを嘲笑う議員たちは『他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい』とののしりました(36節)。

また、ローマの兵隊たちも侮辱して言いました。『お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ』(37節)と、議員たちと同じように自分を救ってみるかと問うているのです。この自分を救うことに彼らの生きる価値観の基本が透けて見えてきます。いつの時代も、自分が救われることが大きな関心事だということがわかります。

イエスの十字架刑死を巡って、ゴルゴダの丘の上で、十字架に架けられたイエスと、それを見守る者たちのあまりにも対比的な姿が印象的です。私たちは、この丘の上でうごめいているそれらの人々の中に、自分自身の姿を見いだすことができるのではないか。私たちはみな、主の十字架に対して、その傍観者あるいは無理解者、嘲笑者、あるいは単に同情者する者たちの一人ではないかということを恐れるのです。もし、そうであるならば、このゴルゴダの丘の光景は、まさに私たち自身の世界の縮図ということができません。主の十字架を取り巻く世界の現実には、2000年後の現在も同じ状況ではないかと思わされます。

32節から見ていくと、2人の犯罪人がイエスと一緒に処刑されるために十字架にかけられていました。イエスが犯罪人・罪人の一人に数えられているわけです。そのときに、イエスは「赦し」の言葉を語って

います。『父よ、彼らをお赦してください。自分がなにをしているのか知らないのです』と言います。

使徒言行録でステファノが殉教する際に『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』と言って、自分を殺す者たちの罪を負わせないでくださいと、神に頼んでいるのと同じです。まさに自分を殺そうとする者を赦しているのです。イエスと同じです。これは自分の救いのことに関心があるのではなく、他人が罪を犯すことがないように神に祈っているキリスト者の姿を映し出しているのです。

しかし、イエスを殺そうとする者たちは、イエスの衣服をくじ引きで剥ぎ取ろうとします。これは衣服が欲しいのではなく、着ている物を剥ぎ取ることで、その人物の人格を傷つけているのです。他者を傷つけることに、その目的があるのです。このようにして、イエスの十字架刑死は、罪人の一人に数えられたイエスが、徹底した侮辱を受けて、徹底的に蔑まれたことを物語っているのです。ところが、民衆はただ立って見つめているのです。自分の無力さを感じていたのかもしれませんが。深い同情の思いがその顔に浮かび上がっていたかもしれません。一方で、ローマ帝国の圧倒的な権力を背景にして、またエルサレムの宗教指導者たちの圧倒的な権威を背景にして、嘲りの言葉が議員たちとローマ兵たちからイエスに投げつけられているのです。ここで、兵士たちが酸いぶどう酒を飲ませようとしたのも一つの侮辱行為です。十字架刑死の残酷さは誰の眼にも明らかですが、体内から血が流れたすなかで喉の渇きをさらに大きくする目的で、ぶどう酒を飲ませるのです。

ローマの兵士たちはイエスを「ユダヤの王」と呼び、議員たちは『メシア』『選ばれた者』とも呼んでいます。いずれも自分を救ってみると罵るのですが、それは十字架から自力で降りて、自分で自分を救うことができたならばイエスがメシアであると認めてやろうという嘲りから生まれた呼びかけの言葉です。

39節以下では、犯罪人の一人もイエスを罵ります。議員たち、兵士たち、そして一緒に十字架にかけられている犯罪人もイエスを罵るのです。この「罵る」という言葉は、冒瀆を意味します。人生の苦難に直面して、神にどうか自分を救ってくださいと願うのに、ある意味似ています。苦難が自分からなくなれば、自分の問題は解決したと考える思考と似ているといえます。そのように神が問題を片づけてくれるならば、する神の力を信用しようというもので、御利益宗教と同じ発想です。

26節に登場する、イエスを十字架にかけようとする「人々」は、テキストをさかのぼると、13節にあるように「祭司長たちと議員たちと民衆」です。

人が生きるということはさまざまな「獲得」と「喪失」の経験をしていくことでもあります。私たちは

小さい時からの学校教育で、知識にしる運動能力にしる、どれだけ『獲得』できたかが評価基準

にされていますので、逆に「喪失」ということに対しては基本的に脆弱だと言えます。喪失の出来事としては、重篤な病、近親者との死別、逆縁といわれる子どもの死、親友との死別や別離、予期せぬ自然災害や事故などによって生じた突発的な死や離別をはじめとして、受験・就職の失敗や私財や家庭の喪失も喪失の出来事となります。いずれにせよ、これらの「喪失」に直面すると人々は「なぜ、よりにもよって私がこんな不幸な目にあわなければならないのか」「どうして、こんなむごい苦しみや悲しみに出会ったのか」という気持ちを抱くこととなります。このような思いを抱いてしまうのは、不条理な思いや理不尽さを感じているからです。

しかし、問題はそのような喪失や不運な出来事・事態そのものにあるわけではありません。そういう事態に向き合って、どのように対処していくかが上手くできないからです。問題に対して対処できない自分の無力さや非力さに圧倒されてしまうことに大きな問題があるのです。

たとえば、癌などの病でターミナルな状態に陥ったとき、変えることができない事態に直面しているのですが、そのとき、その事態に対して「どのような態度をとるか」が問われているのです。その意味で、イエスが十字架上から『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです』（34節）と言った言葉の意味は大きいのです。自分自身を喪失するという極限状態でも、その喪失の事態に対して、自分を殺す行為をする者たちの赦しを願うイエスの態度にキリスト者としての態度決定の大切な指針が示されているのです。ステファノも同じような事態に対して、イエスと同じ態度をとりました。イエスの十字架は私たちの罪を贖うものですが、贖われた者として、人生途上のいろいろな喪失の事態に直面しても、それらを受容してみるところから、私たちキリスト者は出発してみることができるよう導かれていると思われま